



某アイスクリーム店の店長はある年の8月1日から14日の最高気温と来客数を記録した結果、以下の表のようになりました。

日付	最高気温	客数
1	29	312
2	30	348
3	29	284
4	32	369
5	33	420
6	32	536
7	34	652
8	27	275
9	28	294
10	32	368
11	31	451
12	32	405
13	30	561
14	28	422

このデータを元に店長は帰納推論により以下の規則を導いた。  
帰納推論とは、実際の経験や観測に基づく複数のデータから、共通する、「A（前提）ならばB（結果）」という一般的な規則（命題とも言われます）を導く論理推論です。

「最高気温が高いならば、客数は増える」

### Point!

しかしこれはあくまでも推測なので、絶対に正しい規則ではありません。

不完全な帰納推論に対して適切な疑問を選ぶ力が、この帰納推論パートでは求められます。

### 【適切な疑問】

● **最高気温が高ければ本当に客数が増えるのか？**

10日以降は最高気温が高くても客数が必ずしも多くなっていない場合があります。

● **客数が減れば、最高気温は低いということか？**

実際、客数が少なくても最高気温が高い日もあります。

● **気温が高いと湿度は低くなるので、湿度が低いせいでアイスクリームが欲しくなるのでは？**

「最高気温が高い」という前提が、本当の要因ではない可能性があります。

このようなニセの相関関係（擬似相関）を疑うのも適切な疑問です。

### 【不適切な疑問】

× **客数が増える要因は、最高気温ではなく曜日ではないのか？**

「AならばB」という規則（命題）が正しくても、その逆である「BならばA」が正しいとは限りません。擬似相関を疑うことは前提と結果の両方に影響する別の要因の存在を疑うのに対し、逆を疑うことは前提を否定していることです。

× **「最高気温が低ければ客数は増えないのか？」**

「AならばB」という規則（命題）が正しくても、

その裏である「AでないならBでない」も正しいとは限りません。